

大英帝国製PDA Psion Series3/3a用の パワーアップ!

〈一応 最終回!〉

さて、今回は「Psion特集その2」である。本来なら、この記事は前号に掲載される予定であったが、急遽PTP-20についてご報告することになってしまい、1号遅れてしまった。このあたりの編集方針は、結構行き当たりばったりのようである。申し訳ない。m_m

さて今回は、日本語FAX送信の方法を中心に、Psion用の小物をご紹介します。



写真2 Psion3FAX本体



写真3 Psion3FAXの電池ボックスのカバー(芸が細かい!)

注1)内蔵メモリが256KBのSeries 3 a

Psion Series 3 aの内蔵メモリは、現在では512KB以上の製品しか見受けられないが、以前は256KBの製品も用意されていた。いまと違っては、おそらく入手不可能であろう。

注2)NEW WORLD TECHNOLOGIES, INC.

Psionを専門に扱っている通販会社である。この会社以外にPsionを扱っているところは筆者は寡聞にして知らない。そういった意味では、非常に貴重なショップである。連絡先は、下記のとおり。

110Greene St, Suite
1100New York, NY 10012
TEL: 212-941-4633
FAX: 212-274-8527

筆者は何回もこのショップから個人輸入をしているが、納期も早くトラブルもない。信頼できるショップである。

余談だが、日本国内でもPsionを扱うショップが出現してもよいような気がするのだが……。

純正FAXモデム「Psion 3 FAX」

Psion Series3aには、モデムが内蔵されていない。したがって、PsionでネットワークにアクセスしたりFAXを送信する場合には、Psion専用の純正FAXモデムを用いることになるが、それが「Psion 3 FAX」である(写真1)。

Psion 3 FAXは、Psion本体内蔵メモリが512KB以上の機種でしか使用することができない。したがって、内蔵メモリが256KBのSeries 3 a(注1)や、Series 3 では使用できない。

Psion 3 FAXの商品構成は、以下のとおりである。

- ・Psion 3 FAX本体
- ・ユーザーズ・マニュアル
- ・CompuServeイントロキット

購入先はPsionシリーズを専門に扱っているアメリカの通販会社、NEW WORLD TECHNOLOGIES, INC.(注2)で、カタログ価格は249ドルであった。

Psion 3 FAX本体はPsion本体の半分ほどの大きさで、外観の材質、色は、Psion本体に合わせてデザインされている(写真2)。

Psion 3 FAXの両側には、接続コードが2本出ている。ひとつはPsion本体のシリアルポートと接続するためのもので、コネクタ形状は専用の6ピンである。もう1本は、電話回線のモジュラージャックに接続するためのものだ。

Psion 3 FAXの電源は、単三乾電池2本である。この電池はPsion 3 FAX底面の電池ボックスに格納するが、この電池ボックスのカバーも、本体の拡張スロットのカバーと同じように、斜めに開閉するデザインとなっ



写真1 Psion3FAXの商品構成

ており、芸が細かい(写真3)。

Psion 3 FAXには、ソフトウェアを収納したFDが付属していない。これは、通信に必要なソフトウェアが、すべてPsion 3 FAXのファームウェアに格納されているためである。

●インストール

初めてPsion3FAXを使用するときには、Psion Series 3 上にて簡単なインストールを行う必要がある。まず、Psion3FAXとPsion本体とをケーブルで接続する。次に、Psionのシステムスクリーンで、通常のアプリケーションソフトを登録する方法と同じように、Psion3 FAXのファームウェアに格納されているソフトを登録する。

まず、Psion+[I]キーで登録画面に入る。Psion 3 FAXが接続されていると、それがドライブCとして認識される。ここで、「Fax通信ソフト(Fax)」「コミュニケーションソフト(Comms)」および「Faxカバーシートエディタ」の3つのソフトウェアを、システムスクリーン上に登録する。以上でインストールは終了だ(写真4)。

●パソコン通信を行う

Psion3FAXは、2400bpsのモデム機能を内蔵しており、パソコン通信を行うことができる。ただし、日本語対応にはなっていないため、外国のネットワークにアクセスする場合は問題ないが、日本ではNIFTY-ServeにSVEモードで接続する程度にしか使えない。

パソコン通信を行うには、インストールでシステムス

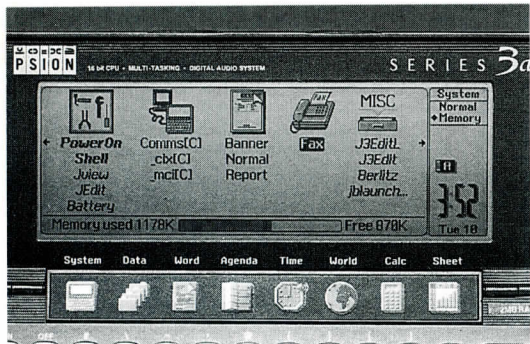


写真4 システムスクリーン上に登録されたPsion 3 FAXアイコン

クリーン上に登録した「コミュニケーションソフト(Comms)」アイコンを使用する。通信ソフトを起動すると、ターミナルモードに入る。そこで、[Menu]→[File]→[Execute script]を指定し、Cドライブに内蔵されている「Comms」というスクリプトファイルを実行する。これで初期設定は終了し、あとは通常のATコマンドでネットワークにアクセスすればよい。

今回はNIFTY-Serve Road 1にSVEモードでアクセスしてみたが、問題なく接続できた(画面1)。試しに日本語の電子メールを閲覧してみたが、当然のことながら2バイトコードは化けてしまう。しかし、コードが化けたメールを[Menu]→[Transfer]→[Capture]で、いったんファイルに落としておき、本誌10月号でご紹介したJEditを用いて開くと、きちんと読むことができる。

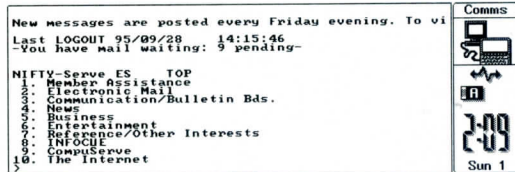
未読メールをとりあえず文字化け状態でファイルに落としておき、あとで読むという使い方であれば、日本語の電子メールをチェックすることが可能だ。このあたりは、今後Psion専用の日本語通信ソフトの出現に期待したいところである(注3)。

●FAXを送信する

Psion 3 FAXでは、9600bpsのスピードでFAXを送信することができる。英語のファイルを送信するのであれば、操作は非常に簡単だが、日本語ファイルのFAX送信となると若干複雑になってくる。今回は、このFAX機能を使用して、日本語FAXを送信する方法についてご紹介する。

(1)日本語イメージファイルの作成

Psion 3 FAXでは、2バイトコードを通すことはできないので、直接日本語のファイルを指定して送信することは不可能だが、日本語のファイルをいったんグラフィックイメージに落とせば、日本語も送信することが可能である。そこでまず、日本語のイメージファイルを作成する。今回は、日本語エディタであるJEdit(注4)を使用して日本語を表示させておいて、画面をキャプチャーする方法を採った。



画面1 Psion 3 FAXを使用して、NIFTY-ServeにSVEでログインした

まず、JEditでFAX送信させたい日本語ファイルを表示する。JEditでは、1画面に9行×32文字が表示できる。この状態で、Psion内蔵の画面キャプチャー機能(Control+Psion+Shift+S)を使用して、画面イメージをファイルに落とす。

すると、内蔵RAMドライブ(Mドライブ)のルートディレクトリに、SCREEN.PICという名前のファイルが生成される。これで、イメージファイルの作成は終了である。

(2)Psion 3 FAXの初期設定を行う

FAX通信ソフトを起動させて、各種初期設定を行う。ここでの設定は、途中で変更がなければ、最初に1回行っておくだけでよい。

- ・FAXファイル格納ドライブと、カバーシートファ

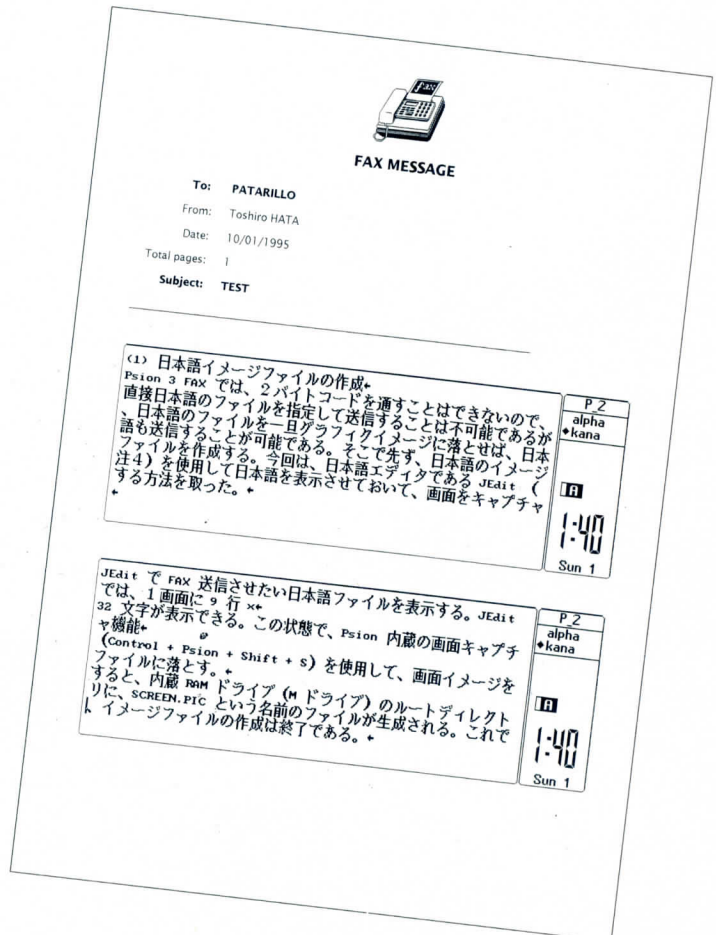


注3)Psion専用の日本語通信ソフトの出現に期待したいところである

日本語のメモが取れるJEditができていますので、これで日本語通信ソフトが整備されれば、携帯端末として、必要最小限の機能が用意され、かなり強力になる。誰かつくってほしいかなあ……。

注4)日本語エディタであるJEdit

筆者の知人で、パームトップ廃人であり、かつ世捨て人でもある、柴隠上人稀瑠異閣守(Kerberos)氏が作成した、Psion専用日本語エディタ。本誌10月号のFunky Goodsでご紹介したものを。



▲Psionから送ったFAXの受信結果

イルの指定

Menu→Special→Set preferencesを選択し、Drive for fax filesの項目をInternalに設定する。また、Default coversheet templateで、カバーシートとして使用するテンプレートファイルを指定する。

・FAX送信元情報の設定

Menu→Setup→Sender detailsを選択し、Sender nameなどのFAX送信元の情報を設定しておく。当然ながら日本語は使えないので、ローマ字表記となる。

・電話回線の設定

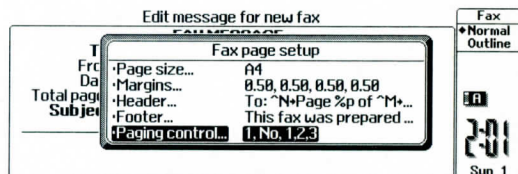
Menu→Setup→Dialing detailsを選択し、「Dial method」でトーン/パルスの指定を行う。また、「Area codes dialled」の項目を、「As entered」に設定する。

以上で、Psion 3 FAXの基本的な設定は終了する。

(3) FAXメッセージの登録

つぎに、送信するFAXメッセージの登録作業を行う。FAX通信ソフトを起動すると、Fax log画面となり、NEWという項目が選択されている。この状態で、Enterキーを押し、登録画面に入る。

・画面マージンの設定



画面2 FAX page Setupの画面。マージンを調節する

Edit message for new faxの画面に入り、Menu→Special→Faxpage setupを選択する。このなかのFaxpage setupで、ページサイズとマージンを設定する。

今回は、ページサイズとしてA4を、マージンはTop, Left, Right, Bottomをそれぞれ0.5、0.5、0.5、0.5に設定する(画面2)。

・画面ファイルの登録

Menu→Cover→Pictureを選択し、FAX送信するイメージファイルを登録する。

まずPicture Nameの項目で、日本語イメージファイルとして作成したSCREEN.PICを指定する。次に、画面スケールを設定する。送信するFAXイメージファイルは、なるべくA4いっぱいに表示するほうがよい。

●キーボード・モニタ・シリアル切り換えスイッチ

筆者は以前、本誌上でひとつのキーボードとモニタを、複数のパソコンで共有するための切り換えスイッチをご紹介したことがあるが、今回ご紹介するのは、これにシリアルまで加わった製品である。購入場所は、秋葉原にある自称「最小級のPCナノストア」NOVUM(ノウム)というショップである。

1台のモニタを複数のマシンで共有できるモニタ切り換え器は、秋葉原のショップでもよく見かける。しかし、モニタは共有できても、キーボードが何台もあるのではスペース的にも苦しいし、エレガントではない。そこで、モニタのほかにキーボードも共有できるように、同時に切り換えることができるスイッチが登場したが、なぜか

このタイプの製品は秋葉原のショップでは見たことがなかった。今回ご紹介する切り換え器は、さらにマウスも共有できるように、シリアルまで同時に切り換えることができる製品である。

スイッチボックスの裏面には、モニタ用としてD-Sub 15ピンメスコネクタ、キーボード用として5ピンDINコネクタ、およびシリアル用としてD-Sub 9ピンコネクタが、それぞれ5個ずつ並んでいる。1個はCommonで、他の4個を4台のマシンのモニタ・キーボード・シリアルコネクタに接続し、切り換えて使用する。

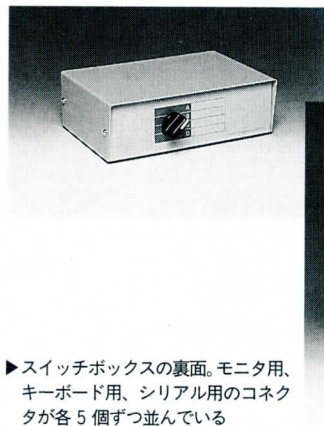
この切り換え器を使用すれば、1台のモニタ・キーボード・マウスで、4台のマシンを利用することが可能となる。筆者の作業机はスペースが少ないため、各マシンで共有することができるのは非常にありがたい。ちなみに筆者は、キーボードはDATALUX社のSpace-Saver Keyboardを、マウスはカラーニマウスを使用しており、4台のPC/AT互換機でこれらを共有している。

実はこの製品、今年の5月の連休に香港を訪問した際、星光電腦城内のショップで見かけたのだが、そのショップがいつ行っても閉まっており、結局購入できずに帰国した経験がある。よもや国内で購入できるとは思ってもみなかった。

価格：7500円

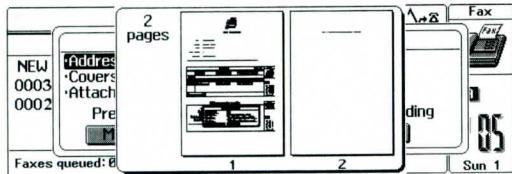
購入店：NOVUM

TEL03-3253-8782(通販あり)



◀キーボード・モニタ・シリアル切り換えスイッチ

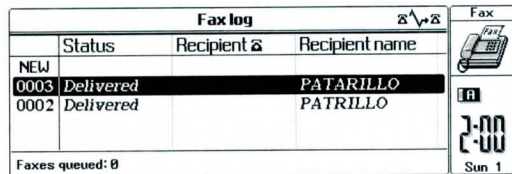
▶スイッチボックスの裏面。モニタ用、キーボード用、シリアル用のコネクタが各5個ずつ並んでいる



画面3 送信するFAXのプレビュー画面



画面4 FAX送信先の電話番号と名前を指定する画面



画面5 Psion 3 FAXのFAX送信ログ確認画面

ここでは、Scaling WidthとHeightをともに3とし、画面を縦横ともに3倍に拡大して送信するように設定する。

・FAXファイルのプレビュー

FAX送信するファイルを登録すると、Edit message for new faxの画面に、送信ファイル名が追加される。今回は、「01:/Screen.pic」というファイルが登録されている。

この状態で、Menu→Special→Previewを選択し、登録したファイルがきちんとページ内に収まっているかどうかを確認する(画面3)。

・FAXファイルの送信

Psion+Xキーを押してFAX送信ファイルエディタから抜けると、FAX送信先の指定画面に入る(画面4)。ここで、FAX送信先の電話番号の指定と受取人の氏名を入力する。過去に送ったことがあれば、History listを指定すると、以前送信した相手先を呼び出すことができる。

最後にEnterキーを押せば、FAX送信が実行され、Statusの項目がDeliveredに変われば正常に終了したことになる(画面5)。

AT互換機上で使う「Psion Emulator」

これは、IBM PC/AT互換機の英語DOS上で、Psionのアプリケーションをエミュレートするソフトウェアである。Psion社から供給されているフリーソフトであり、CompuServeのpalmaフォーラムにあるPsion LIBや、Psion専用のftpサイト(注5)、「ftp:src.doc.ic.ac.uk/packages/psion/icdoc」から入手できる。ファイル名

は、下記のとおりである。

- ・s3 aemu.zip : Psion Series 3 a用エミュレータ
- ・s3 emu.zip : Psion Series 3用エミュレータ

なお、Psion社では、このソフトについてのサポートはいっさい行っていない。

実際にIBM PC/AT互換機上に、このエミュレータをインストールしてみる。今回は、筆者が日々原稿作成に使用しているサブノート、HP OmniBook600C(注6)に導入してみた(写真5)。

導入手順は、下記のとおりである。

(1)エミュレータソフトを解凍する

HDD上に適当なディレクトリを作成し、そのなかにエミュレータ用ソフトを解凍する。今回は、Cドライブ上に「s3 aemu」というディレクトリを作成し、そのなかに必要なファイルを解凍した。

(2)ディレクトリを作成する

Psion本体では、Mドライブが本体内蔵のRAMドライブで、A、Bドライブが拡張カード用ドライブとしてアサインされている。このため、各ドライブを互換機上のディレクトリに対応させる必要がある。

今回は、互換機上のCドライブに作成したs3 aemuディレクトリをMドライブとして割り当てた。また、s3 aemuディレクトリ下にAおよびBという2つのディレクトリを作成し、それぞれを、Psion上のAおよびBドライブとして割り当てることにした。

(3)エミュレータ起動用のバッチファイルを作成する

Psion上の各ドライブが、互換機のHDD上に作成された各ディレクトリに対応するように、substコマンドを使用して設定を行うバッチファイルを作成する。バッチファイルの内容は、下記のとおりである。



写真5 OmniBook600C上で、Psionエミュレータが動作しているところ

注5)Psion専用のftpサイト「ftp:src.doc.ic.ac.uk/packages/psion/icdoc」

アノニマスftpで入ることができる。また、PsionではWebサーバも開設されている。

HTML: http://src.doc.ic.ac.uk/packages/psion

注6)HP OmniBook600C

筆者溺愛のサブノートパソコン。もちろん、アメリカから個人輸入した英語版を使用している。このOmniBookシリーズであるが、本年9月21日には、ようやく日本ヒューレットパカード(HP)から、日本語化製品が発売された。しかし筆者は、キートップに「かな」が印刷されている日本語キーボードより、英語キーボードのほうが好きなので、OmniBook日本語版にはあまり興味がない。

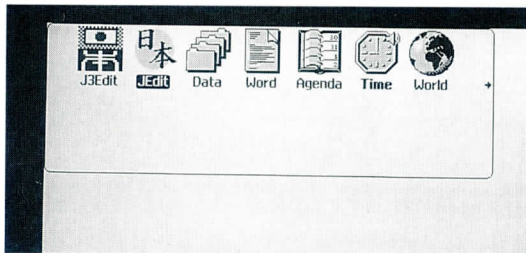


写真6 OmniBook600C上のシステムスクリーン上に登録されたJEditアイコン

*s 3 a.batの内容

```
echo off
c:
cd ¥s 3 aemu
SUBST M: C:¥s 3 aemu
subst a: c:¥s 3 aemu¥a
subst b: c:¥s 3 aemu¥b
s 3 aemul.exe
subst m: /d
subst a: /d
subst b: /d
```

(4)エミュレータを起動する

英語モードの状態で、上記バッチファイルを実行し、エミュレータを起動させる。

すると、見慣れたPsionのシステムスクリーンが出現する。キーアサインは、[f9]がメニューキー、[f10]がヘルプキー、[f1]がシステムスクリーンに戻るキーとなっている。また、Psionキーは[Alt]キーにアサインされている。エミュレータの終了は、[Ctrl]+[Alt]+[Esc]である。

せつかつなので、エミュレータ上でPsionのアプリケーションを動作させてみることにする。今回は、本誌10月号でご紹介した、Psion Series 3 a上で動作する日本語エディタ、JEditを、このエミュレータ上で動作させてみた。

JEditのインストールは、Psion上でのインストールと同様に行えばよい(写真6)。起動させると、OmniBook

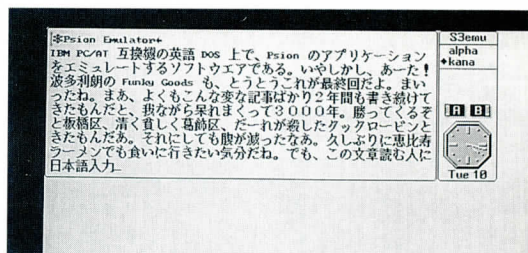


写真7 OmniBook600C上でJEditが動作しているところ

600C上の画面に、Psion日本語エディタの画面が開き、そのなかで日本語の入力が行えるようになる。英語モードで立ち上げたOmniBook600C上でPsionエミュレータを起動し、JEditを使用することで日本語の入力ができる……というのは、なかなか奇妙な感じである(写真7)。

なお、このエミュレータでは、本物のPsionと同様に、各プロセスはマルチタスクとして動作している。

Psionエミュレータを使用すれば、Psion本体を持っていない人でも、Psion用のアプリケーションを体験することができる。ぜひこの機会に試していただきたい。

さて、ここでもうちょっと変な実験を行ってみよう。上述したPsion用エミュレータには、Series 3 a用のものとSeries 3用の2種類があるが(注7)、このうちSeries 3用のものには、CGAドライバが付いてくる(注8)。したがって、パームトップなどのCGA画面でも起動できるはずだ。そこで、HP-100LXに、Series 3用エミュレータを導入してみた。

導入方法は、Series 3 a用のものと基本的に同じである。注意する点は、HP-100LX側の環境で、日本語環境も含めて、なるべく余分なドライバ類は外しておいたほうがよい。ちなみに、筆者がテストした際のconfig.sysファイルは、下記のとおり、非常にシンプルこのうえないものである。

```
buffers=30
files=30
lastdrive=n
```

要するに、コンベンショナルメモリをなるべく多く空けておくことが必要である。その他の注意点としては、Series 3 a用エミュレータのときと同様に、substコマンドを用いて、各ドライブの環境を設定しておくことである。

エミュレータを起動すると、100LXの画面上に、2個のウィンドウが開く(写真8)。上のウィンドウは、実際にPsion Series 3で表示した場合と同じピクセル数で表示されており、下のウィンドウはそれを拡大表示したものである。

この画面を見ると、パームトップパソコンの画面解像度の進歩がよくわかって面白い。昔のパームトップは、

注7)Series 3 a用のものとSeries 3用の2種類があるが

Series 3 a用は、VGAオンリーでしか使用できない。一方、Series 3用はVGAのほかに、CGAでも使用できる。

注8)CGAドライバが付いてくる

Series 3用エミュレータのアーカイブファイル、s3emu.zipのなかには、下記3つのディスプレイドライバが格納されている。

- wsrvhdhv.zip: VGA用ウィンドウサーバ
- wsrvhdh.zip: Hercules用ウィンドウサーバ
- wsrvhdc.zip: CGA用ウィンドウサーバ

今回は、HP100LXのCGA画面上に表示させるため、wsrvhdc.zipを解凍して使用した。

● 電脳音效控制器



このグッズも秋葉原で見つけ、さっそくご紹介しようと思っていたのだが、11月号で山口真也氏に先を越されてしまったので割愛する。しかし、若干補足をば……。

この製品のパッケージに書かれている能書きであるが、ちょっと気が利いており、なかなか面白い。「装着迅速、不須電源」「絶無軟體衝突問題」とある。言われてみれば、確かに「絶無軟體衝突問題」である。よい表現だと、妙に感心してしまった……。



写真8 HP-100LX上でPsion Series 3用エミュレータを起動させているところ

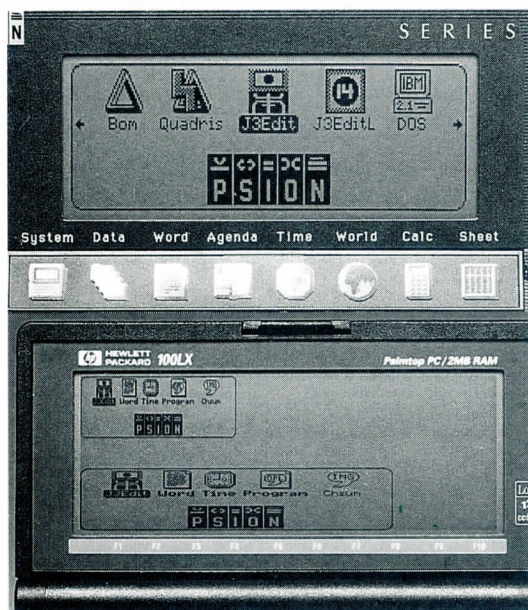


写真9 モノホンのPsion Series 3画面(上)とHP-100LX上でエミュレーションしたSeries 3の画面

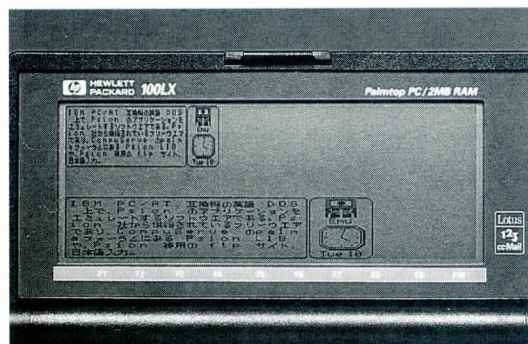


写真10 HP-100LX上でもJ3 Editが問題なく起動した

画面上部のウィンドウ程度の大きさしか表示できなかったということである(写真9)。

さて、このエミュレータ上でも Psion Series 3 用の各種アプリケーションを動作させることが可能だ。試しに J3 Edit を登録して起動してみたが、正常に動作した(写真10)。

日本語環境を構築していない HP-100LX 上で Psion エミュレータを起動し、そのなかで日本語入力を行うというのは、なんだかわけがわからないが面白い光景だ。それ以前に、パームトップパソコン上で他機種のパームトップパソコンのエミュレーションを実行するというのも、考えてみると結構変である。とにかくこのエミュレータ、結構遊べる。HP-LX を持っておられる方には、ぜひ試していただきたいものだ。

おしゃれな本体にふさわしいケースを

せっかくおしゃれなパームトップを持っているのだから、ケースにも凝ってみたいものだ。そこで今回は Psion 用のケース 2 種類をご紹介します。

まず、「Zip & Filp case-S 3 a/3Fax」(写真11)は、Psion Series 3 a と Psion 3 FAX をいっしょに格納する、レザーケースである。

Psion Series 3 a 本体はマジックテープでケースに固定し、Psion 3 FAX はバンドで固定するようになっている。ケース内には、ペンホルダーと SSD を格納するポケットも用意されている。外形寸法は 213mm×162mm×38mm で、色は黒だ。

購入先は NEW WORLD TECHNOLOGIES, INC. で、カタログ価格は 75.00 ドルだった。

次に「Deluxe Leather Carrying Case」(写真12)だが、パームトップ用ケースを多数扱っているので有名な Palm Tree Products, Inc. が製作している、システム手帳のようなコンパクトなレザーケースである。Psion 専用のケースというわけではなく、HP-95LX、100LX、Sharp Wizard5000、7000Series などにも使用できる。



写真11 Zip & Filp case-S 3 a/3 Fax

写真12 Deluxe Leather Carrying Case

ケース内部には、ペンホルダーとカード収納ポケットが用意されている。

外形寸法は、Psion Series 3 aを格納した状態で、174mm×114mm×43mm程度である。色は黒。筆者は、このケースを愛用している。

このケースも、購入先はNEW WORLD TECHNOLOGIES,INC.で、カタログ価格は50.00ドルだった。

シェアウェアを収めたCD-ROM

これは、Psion Series3/3a用のシェアウェアを400本以上収納したCD-ROMである(写真13)。オーストラリアにあるKOCH Mediaという会社の製品である。購入先は例のごとくNEW WORLD TECHNOLOGIES, INC.で、カタログ価格は45.00ドルだった。なお、商品名は「Shareware on CD Rom」である。

Psion本体で動作するユーティリティ、ゲーム、画像、音声関連のさまざまなソフトが格納されている。



写真13 Psion Shareware CD-ROM (Volume 1)

Psion関連の書籍

次に、Psion関連の書籍をご紹介します。ここに掲載したものの以外にもまだまだあると思われるので、興味のある方は探していただきたい。

- Using the PSION Series 3 a(写真14)

著者：Bill Aitken

発行元：Capall Bann Publishing

概要：Psion Series 3 aの内蔵アプリなどのマニュアル本

- First Steps in Programming the PSION Series 3(写真15)

著者：Mike Shaw

発行元：Kuma

概要：Psion Series 3の内蔵OPLによるプログラミング入門書

- Serious Programming on the PSION Series 3 a(写真16)

著者：Bill Aitken

発行元：Kuma

概要：Psion Series 3 aの内蔵OPLによるプログラミング入門書。「Serious」と謳うだけあって上級書籍よりも詳細な内容となっている

- Machine Code Programming on the PSION 3 a & 3(写真17)

著者：John Farrant

発行元：Kuma

概要：Psion上での8086マシン語プログラミング入

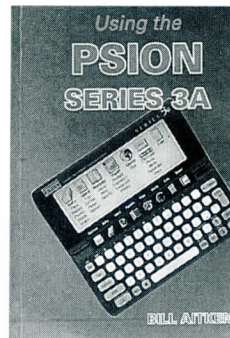


写真14 Using the PSION Series3a

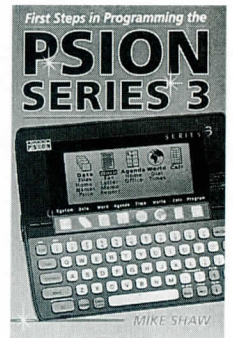


写真15 First Steps in Programming the PSION Series3

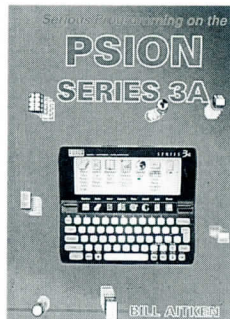


写真16 Serious Programming on the PSION Series3a

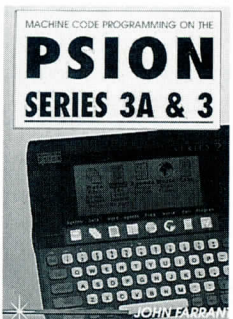


写真17 Machine Code Programming on the PSION3a & 3

門書

本体を固定する専用スタンド

最後にご紹介するのは「変なもの」と相場が決まっているので、今回はそれに従うことにしよう。

Psion Desk Standは、その名の示すとおり、Psion専用のスタンドである。それ以上でも以下でもない。ただ単にPsionを置くためだけにつくられた製品だ(写真18)。

とはいっても非常に巧妙にできている。Psionは、その構造上、ケースを開くと電池を格納している部分が出っ張ってしまうが、このPsion Desk Standには溝が付いており、その出っ張りがぴたりと収まって、しっかりと固定されるようになっている(写真19)。

Psionをスタンドに立てかけると、ちょうどよい角度が付いて、文字の入力が楽になる。本体はアルミ製で、結構重量感がある。その外観は、アルミの押し出し成形パイプを輪切りにしたような感じだ。この製品も、例によってNEW WORLD TECHNOLOGIES,INC.から購入した。カタログ価格は、38ドルだった。Psionは本体そのものもなかなかユニークだが、小物類もそれに劣らず面白いものがあり、なかなか楽しい。

*

さて、1994年4月号より連載を開始した「波多利朗の

Funky Goods」だが、この辺でそろそろお休みをいただくことにする。当初、編集部のshu女史に「6回程度の連載物」ということで依頼を受けたのだが、同女史の術策にまんまと陥り、なんだかんだとズルズル回を重ねてしまい、気が付いたらなんと今回で21回目になってしまった。

秋葉原のジャンク屋を紹介したり、キーボードを腐るほど並べたり、はては謎パー機を勢揃いさせたりと、毎回「誰がこんな記事を読むのかいな？」と思うような、いい加減で怪しい内容を書いてきたのだが、結構ゲテモノ好きの方は多いようで、変な意味で(悪い意味で?)好評だったようだ。ご愛読感謝感激雷おこし、である。

ちなみに、本連載を執筆するにあたって、筆者が編集部から受けた指示はただひとつで、「なんでもいから、とにかく変な記事を書いてくれ」ということだけであった……。なんだかなあ。-_-;;

筆者も平日は某電機メーカーに勤める一介の真面目な(?)サラリーマンなのだが、最近是他の企業へ技術派遣に行かされたりと本業のほうが忙しく、ネタはあるのだが、書く暇がなくなってきた。本連載の原稿料だけで食っていけるのであれば、この際専業ライターになるのも悪くはないのだが、いかんせん、いまのPC WAVEの原稿料だけでは餓死は確定であろう。-_-;;

冗談はさておき、ちょっとの間、充電ということで休載させていただくことにする。また、何か面白いものが

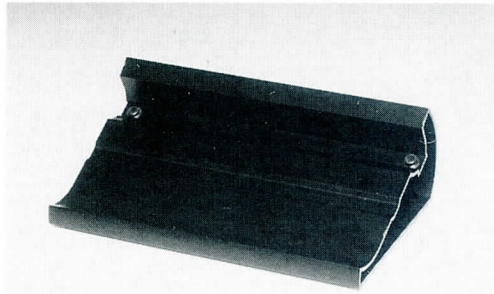


写真18 Psion Desk Stand

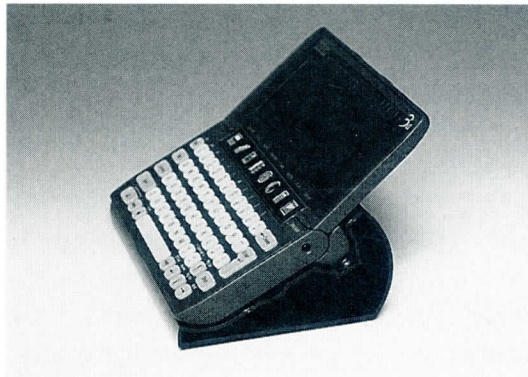


写真19 Psion Desk Stand
を横からみたところ

あったら、随時登場させていただく。その際には、またよろしくお願ひしたい。

とりあえず、もし行けたら、また裏コム(編集部注:裏COMDEXレポート)でも書こうかな……。

●Micronics M54Hi PCI/ISA System Boardをわが愛機に

仕事の合間を縫ってやっと出かけた秋葉原で、次期メインマシンに組み込む予定のマザーボードを購入した。

筆者は昔からMicronics社のマザーボードのファンで、自作のメインマシンにはほとんど同社のマザーボードを使ってきている。

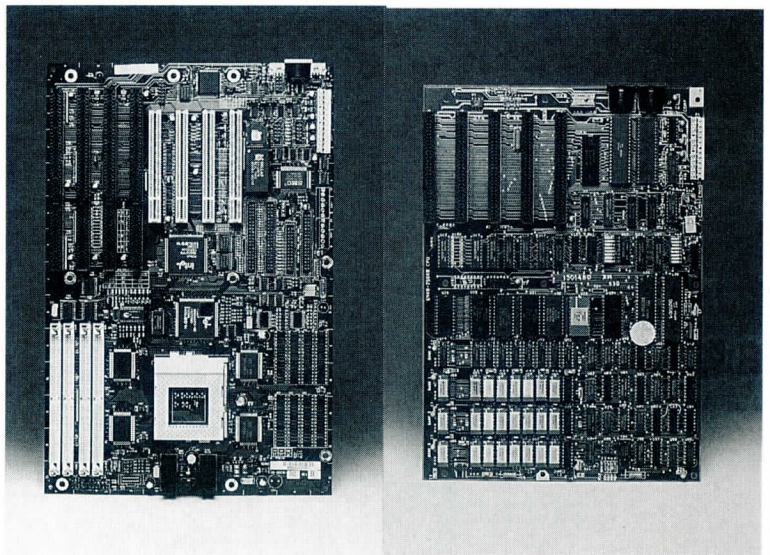
遅ればせながら、今回ようやくTritonチップセットを使用したPBSRAM搭載のM54Hiを購入することができたわけである。

購入店は秋葉原のフリップ・フラップで、価格は税込みで4万6144円だった。ボードは95年29週製造で、リビジョンはBである。ジャンパ線はまったくない。仕事が一段落したら、現在のメインマシン(まだDX4-100MHzを使用中)の中身をごっそり入れ替える予定なので、その際、このマザーボードを使用するつもりだ。

というわけで、M54HiとIBM The PCのマザーボードを並べてみたのが右の写真だ。

IBM Personal Computer(The PC)が発売されたのが1981年のことであるから、両者の間には14年の歲月

の隔たりがある。この期間を長いと見るか短いと見るか、それは各人各様であろう……。



▲M54Hi

▲IBM The PCのマザーボード

波多利朗の
Funky Goods